一一六〇句を読んで

澤好摩／山田耕司

手堅さを読み取る

山田　第三回円錐新鋭作品賞、澤さんの第一位をお願いします。

澤　はい。「シェフを呼ぶ」。この作品は、一句の緊密性ということでいえば危うい句も入っているんだけれど、面白い視点がいろいろある。

たとえば、

スープです鮫がしづんでゐるだけの
溶けぬバター溶けたバターに浮いて春

こういうのが、「いいなあ」と思いました。なかなか面白い。

山田　こちらの作品は、全体が食べ物にまつわるものになっていますね。一つのテーマを維持しています。「シエフを呼ぶ」私は三位として、いただきました。

タバスコの蓋は八角目借時

なども面白く感じましたね。

澤　僕もマルをつけてある句。ただ、「目借時」が効いているのかどうか、いまひとつピンとこなかったね。

山田　それから、

シエフを呼ぶゐもしない蚊をうつやうに

所作であるところの「蚊をうつ」をイメージさせておきながら、実のところ、「シエフを呼ぶ」ことにも「蚊をうつ」ことにも属さないような不思議な行動へと読者を誘うところがありますね。「やうに」というのが説明に堕すのではなく、けったいな感覚へと読者を連れ込む装置になっているところが俳句ならではの手練れ感を含んでいるように思いました。

澤　ちょっとへんな句だけど、

マスカットとサラダボウルの接地面
これにも惹かれましたね。それから
猫の恋ベシャメルソース色の月

とかね。けっこう面白いなあと思いました。

山田　なるほど。澤さんが一位に上げていらっしゃるのは、やはりここに〈安定感〉を見出していらっしゃるからかな、と思いました。たしかに、一句一句に関しての手堅さを読み取ることができると思います。食べ物という素材を扱う、つまり日常的な感覚に接続されているからかもしれませんが、発句的な押し出しよりも平句的なかろやかさが文体としてうまく機能しているようにも思います。

円錐新鋭作品賞の「新鋭」たるところには、もうちょっと荒削りながらもチャレンジしている側面を期待してしまうところがあり、私は一位にいただきませんでした。とはいうものの、この作品の作風を低く評価するものではありません。

澤　荒削りながらもチャレンジしている作品に期待したいと山田氏は言うけれど、荒削りなのを作者自身が承知の上で書いているようなのは、私は取らない。もっと自らに厳しくあって欲しい。だから、安定感をよしとしているのではなく、一句として傷の多い句は取れないと言うことなんです。

「俳句的」なるものとの距離

山田　私から一位の発表をさせていただきます。白桃賞は「青い万年筆の家」ということにさせていただきます。こちらの作品からは「俳句的なものにあまりふかく馴染みすぎないようにしている」姿勢を読み取りました。

寒鯉を見に行く簡単な靴で

「俳句的」と申しますのは、たとえば、「寒鯉」という季語をめぐっては、どうしても「命の尊厳」「孤独と静謐」みたいな重たい考えをまとわりつかせようとする配慮のこと。「自然」と「人間」の深いところでの交流というものを見出そうとする傾向とも言えるのですけれど、それがわりあいと類型化してしまう。類型化されている句を、「お、わかってるな」ということで読者が評価して、それらの類型化が定着していってしまうきらいがある。「簡単な靴で」というフレーズは、そうした「俳句的」な傾向を知らないままでは書き得ないものであると同時に、そこからの距離をとっていることをさりげなく表明するものでもあろうと思うんですね。

ゆるゆるのオムレツ日本橋に雪

日本橋は、大阪の「にっぽん」橋ではなくて、東京の「にほん」橋なのでしょう。一九六〇年代、東京オリンピックのあたりに上空を高速道路が横たわることになってしまった日本橋に、雪。「雪の橋」などというカッコいい絵になることもなく、なにやら言い表しがたい中途半端さが漂う景なのではないかとおもいます。「ゆるゆるのオムレツ」とは、「日本橋に雪」の形状的な比喩ではなくて、心情的なつながりを言葉において言い留めたものなのでしょう。こういう飛躍を飲

み込むためには、作者と読者が対象にむけて同じような感覚を共有していることが求められることが少なくありません。季語に対する一定の類型化もそうしたいきさつから流通しているのかもしれません。ですから、たとえば歴史性や事件などの「ことがら」を作者と読者の間に担保として架けわたすことが、必要なのだと思います。こうして情報化が進んで、それぞれがてんでんバラバラの方向を向いている可能性が高くなっている社会では、特に。そうした中で、詩的飛躍を〈名づけがたい感覚性〉のようなものに留めておくことの面白さや大切さを感じていたのですが、この句に、そんな感覚性を見出したところがあります。

雛壇の前の二重の自動ドア

無機質なものを組み合わせながら、なんとも不思議なおかしみのようなものがある。作者が、自身の〈ねらい〉や〈思い〉を込めているわけではない。であるからこそ、読者の想像力の奥の方に届いて何事かを伝えることがある、という俳句ならではの機能をさらりと使いこなしている印象を持ちました。

澤　ふむ。

山田　であるからこそ、

ドトールをはみ出してゐる福袋
春昼や輪廻の如き寿司レーン
たんぽぽや地球征服したら暇

「はみだしてゐる」という批評性、「輪廻」という意味付け、「地球征服したら暇」という意味条理の太さなどが、もったいないなあと思ったりもしました。

澤　ふむ。余り面白いと思えないね。

山田　とはいうものの、新鋭作品ということで、自分自身の感性を頼みにしつつ〈俳句表現〉への試みを作品化している傾向を評価して、こちらの作品を一位とさせていただきました。

三月や手錠の色の台所

これは「なぜ三月なのか」という読みに出会うと思うんですよね。仮にここを「春闌けて」などとすると、もう少し〈わかってくれる読者〉が増えるかもしれない。けれども、自句を因数分解するそちらの方向に向かわずに、好意的に解釈すれば、規制の〈わかってくれる〉を回避しようとする傾向があるようにも思いました。「三月や」のままが最上手というわけでもなさそうではありますが。

表現を自律的に扱う

澤　第二位は、「蟻のゐる日向」ですね。

蟻のゐる日向自販機撤去され
虫時雨人に反応して点く灯

こんなところが面白いですね。それから、

冬晴れや畑に市街のぞみつつ

これ、なかなか書けそうで書けない句だと思いますね。

水仙やダムの帰りの坂が急

これなんかもいいね。

山田　なるほど。この作品群も安定して

いますね。

画架の絵の置きっ放しや散紅葉

「画架の絵」の垂直な静寂によって、「散紅葉」は静寂性の他に水平性が引き出されていますね。こうしたことは、俳句的な計算が働いていての句ですよね。

澤　それから、

往来を数へるバイトクリスマス

こんなのも、いいね。

山田　ありますね、そういうバイトは。

澤　それと、

朴落葉基地の名残のロータリー

こんなのも良かったかな。ただ、ね、

泳ぎ疲れ革のソファに沈む

こんなところに、まだ出来かかる途中、という感じも持ちましたね。

山田　私の二位ですが、「渓陰鳥魚」です。

こちらは、どの句がとびぬけている、というタイプのたちあらわれかたをしてこない。かといって、連作として何らかのテーマを訴えてくるわけではない。あえて言えば、自分自身の「文体」を活かすための枠として世界観がふるまっているような作品でした。

ゆく処ゆかれぬ処さるをがせ

「ゆく処ゆかれぬ処」というところには、手拍子感、つまりなんとなく語呂がよいので並べてあります、という感覚が示されているようにも見えてしまいます。ところが、全体を見てみると、作者は、「さるをがせ」というひらがなによる表記に寄り添うことを主眼として言葉を選んでいるのではないか、という感覚を読者にもたらします。

いづれふるゆふかみろかも雲薄う
赤せうびんさは蟹くはへゐてしづか
とき知らず滴り落つといふがあり
県見の赤げら小げらたもとほる
このあたり挨拶繁しけらつつき
まづ一尾鰍をるめり石平た
箱眼鏡鰍の貌をまんじりと

こんな流れですね。釈迢空の作品なんかを視覚的に味わっているときに似てるなと思ったんですよね。

いかなるものであれ、「ことがら」というよりは、文体やキレのあり方などの「表現」において自分の立てた律に従うという姿勢に、私は惹きつけられる傾向があるようでして、こちらの作品に魅力を感じた次第です。一歩間違えれば「自家撞着」ということにもなりかねないところなんですが、それを現世の事物とかかわらせつつ成し遂げるところに、俳句表現というものの一つの特徴を見たように思いました。

新しさとは、素材を更新させることではなくて、表現の方を自律的に扱うところから生まれてくるのだろうとかねがね思うところがあるのですが、いささか古風に思える文体も、その人の自律のもとに行われることで、違う可能性へと読者を導くのかもしれません。ただ、文体としての「古さ」のようなものは、教養や

読書環境によってもさまざまで、つまり、文体による作品の評価というのはかなり揺れがちなものだろう、とも思うわけですが。

澤　ふむ。

山田　これは聴覚によって紐付けされた「河鹿」。

雨の上に空のあるなる河鹿かな

こちらは触覚をよすがとする「鰍」。

鰍獲る空の左手の力みをり

漢字の使い分けを身体のあり方によって補う。そのことで読者のイメージをより鮮明にしようとする手業は、自分の句への読みを丁寧にしつつ書きつらねてい句姿勢がこの作者の寝のあたりにあるのかなぁとも思いました。

「書けている」という感覚

澤　私の方の三位は「夏燕」。これはねぇ、無難な句が目立つなぁという印象です。

終戦日浸して洗ふ面と籠手

面紐を紅に替へ寒稽古

谷崎の忌やしたたかに小手打たれ

剣道のことを描いたここらへんが面白いかなあ、と。ただ全体をみると、一貫しているものがあんまりない。

山田　狙ったところに句を寄せていくことができるのが、健やかでいいと思いましたよ、この作品群は。

馬を打つ鞭を逆手に信長忌

これは、「信長忌」という言葉から香り立つところを絶妙に捉えていると思います。しかも、重くれないようにしている配慮もある。

裏方に届く花束パリー祭

「裏方に届く花束」というのは、「パリー祭」という季語のイメージとしてかなり素晴らしいものだと思います。私は個人的にあまり「パリー祭」という季語が好きではないのですが、この句の表現はいいと思いました。

澤　僕はね、

夏燕ターフビジョンを横切つて

この句で「ターフビジョン」っていう言葉がよく出てきたなと感心したね。

山田　生活の中で自分が直接体験したことを作品にしていると読者に思わせる力がある句が並んでますね。ほんとうは設計図が別のところにあるかもしれないわけですけれど。個人的には、この作品の作者は、季語をもっと踏み込んで使いこなす力量があるのではないかと思いました。

澤　ここまでの一位から三位までは、かなり良くできているのではないかと思った作品でしたね。

山田　安定して句を表現しているというところに共通するものがありますね。俳句として「書けている」という感覚でしょうか？

澤　そういうところに重きを置いてしまいますね、どうしても。

山田　私の三位は、澤さんの一位「シエフを呼ぶ」でした。

澤　私の四位は「搾菜」です。
山田　なるほど。
澤　まあね。

のどけしや搾菜のつく瓶ビール

いかにも小市民的なこんな句が並ぶわけだけど。

春シャツの洋菓子店の主かな

こんなのも悪くないなあと。
山田　ふむ。

春光やガソリンの口ぶらさがり

この「ガソリンの口」とは、ガソリンスタンドなどでの給油ノズルのことを指しているのでしょうね。「春光」との組み合わせがことがらとして新鮮な感覚をもたらしますね。

おそろしやかほのをさなき武者人形

ここには、わかりやすい「おそろし」が示されています。ねらったところを書いているんですね。
澤　この句にもマルがついてる。

それから、完成度としてどうかとは思うけれど、

質問の時間あまるや春の昼

というのにマルがついている。
山田　着眼点がことがらとして面白い一方で、五文字の季語が取り合わされるスタイルが多く見られるので、新鋭作品賞としてのチャレンジにおいて、いったんは上部五位までに入ったんですが、他の作品を取り上げさせていただくことにいたしました。ただ、やはり好い句があって、

車椅子にナップザックや春の風

車椅子の主人がどうしているのかということを説明するのではなく、ともあれ、何か開放的な気分を「春の風」で伝えることで、読者の想像を刺激する、そんな感じの点描に優れている作者なんだなと思いました。
澤　その句も良かったね。
山田　私の四位は「パスタごと」です。

パスタごとフォークに巻かれ蛍烏賊

リモコンの黄ばみ増したる帰省かな

〈見たいものを見る〉というよりは、〈見たいかどうか微妙なものが見えてしまう〉という視座を感じさせる句があります。実のところ、〈見たいもの〉と〈見たくないもの〉というのは、視座の主観が大きく入り込むことにおいて近似なのだと思うのですが、〈見たいかどうか微妙なものが見えてしまう〉というのは、俳句にとってなかなか重要な視座なのではないかと思っているのです。

流灯のはやさで歩く女かな

透きとほる物重なりぬ夏料理

このあたりの句には、「追悼」だとか「清涼」だとかの意味の負荷をかけることができそうなのですけれど、それをせずに、〈見たいかどうか微妙なものが見えてしまう〉ようなテイストを維持しているように思えます。

司会者の時計秋日に反射せり

どなたかが予定時間を過ぎて長々と話をしているのかもしれません。会の進行を心に懸ける司会者は、腕時計をちらりとみる。「秋日」という言葉が、その状況を支えています。状況の説明ではなく、抑制のコントロールが効いたスケッチだなと思いました。

麗かや性交渉を示す手話

これは、今回のご応募作品全体でも、かなり面白く読ませていただいた句です。「性交渉を示す手話」ということがらの意味の重たさへの驚きというよりは、「麗かや」という季語との交差において、人の営みがせつなく輝くのを感じた次第です。一方で、

内野手の肩やはらかきカンナかな

「内野手の肩やはらかき」「カンナ」なのか「内野手の肩」「やはらかきカンナ」なのかの戸惑いもあるのですが、文脈上の語の関係性も喩の飛躍性も「かな」で押し込んでしまうというのが、せっかく視座の抑制を見せている作者なのに、もったいないなあと思ったりもいたしました。

澤　「内野手の肩やはらかし」とするところなんじゃないの。

山田　としても「カンナかな」という言い切りは、未消化のままですね。ともあれ、この作者に魅力的な作品をものする可能性を感じさせていただいていることにかわりありませんけれど。

忘れがたいフレーズへ

澤　僕の方からの五番目は、「君は嫁がぬ世界」。

銃声に遅れ雪崩の音わづか
顔に肘当てて小さき嚔かな

ここらへんが、書けてるなと思いました。

除雪車に遅れ除雪車続きけり

この句は、一句として推薦したいと思いましたね。

山田　ちょっと渡辺白泉っぽいところがありますね。シンプルさや、ユーモアにおいて。

澤　そうそう。

山田　二台目は何をしにきたんでしょうね。除雪車が開いた道を通って、別の地域に行くんでしょうか。

澤　「除雪車に遅れ」の後に「除雪車」を持ってくるなんて、なかなか無いと思いましたね。

山田　ふうむ。

澤　他には、

節分の顎髭に面繋がりぬ
給油所へ一町越えて冬日向

とかね。

山田　ふうむ。表題は「君は嫁がぬ世界」となっています。この表題じゃなかったら、また印象が違ったでしょうね。

澤　ああ、それは違うね。

山田　「君は」と「は」で強調しているところに、他の句の自然な表情を妨げる意図を感じてしまいました。

澤　ふうむ。なるほどね。

山田　私から五番目を。「七七日」、これです。

澤　ああ、七七のね。

山田　そうなんです。全句において、調べが七七になっているんですね。意図的に自らを律しているわけです。その行為は、俳句形式における五・七・五への批評性につながりますね。それから、季語というものの働きを顕現化するような作用も見てとることができるでしょう。季語が入っていて定型、このことを貫くことで、現状において流通している五・七・五というスタイルを相対化しているわけですね。

澤　なるほど。

山田　七七というスタイルにおいて、ひとつのまとまった意味内容を示しつつ季語を入れていくというのがいかに難しいのか、そのことを感じさせてくれる句群です。

　凩に貼る収入印紙

着想がなかなか面白くても、さらにここに何かをつけてしまいたくなるのが、俳句作者の業なのかもしれません。「凩」そのものに「収入印紙」を貼ったのか、それとも「凩」の日に何かに「収入印紙」を貼ったのか、たとえばそんな読みの振り幅があった場合、もうひとつ支点があればもっと句の奥にタッチできるのに、という欲が出てきます。まずは、季語の有る無しはおいておくこととして、こうした〈何か大きな情報が欠落したまま詩歌の言葉をひもとく〉感覚は、現代川柳における浮揚感にも通じるものがあると思いました。この浮揚感が〈忘れがたいフレーズ〉を導き出しうるとしたら、それは従来の詩歌の読解をはみ出す典型性への道なのかもしれない、とも思います。ただ、それは、そうそうに生易しい道ではなさそうですけれど。

　さらに、そこに季語を機能させつつ埋めようとすれば、これはタイヘン。作者は相当に苦労なさったと思いますね。

澤　ああ、これは苦労したと思うね。

山田　たとえば、

　尿意強める鵙の一声

澤　あははは（笑）。

山田　これ、わからなくはない感覚なんですよ。ただ、これがこのまま人口に膾炙するかどうかとなると、うまく説明できない欠落感が立ちはだかってくるようなんですね。

　墓のうらに廻る　　尾崎放哉

この存在感とも、違う。

澤　違うね。

山田　季語とは、「わかる」ためのシステムであるということができるかもしれません。その「わかる」というのは、人間の内面的な個別性を消去する方向での相互了解、ということになる。俳諧の連歌であれ、歳時記であれ「俺の桜」なんてものを流通させたら、二の句が継げなくなるわけですね。一方で、自由律や短句での作品は、どうも、個人的な内面性のありようをこそ作句の動機とし、かつ、読解のよすがとする点があるようにも思います。ということで、季語を読み

のよすがとするような状態の短句というのは、ちょっと居心地が悪いのかなあなどとも思いました。

澤　ふむ。

山田　「盗人をとらへてみればわが子なり」を招来させるための「斬りたくもあり斬りたくもなし」のような仕掛けがありますね。本来ならば句の奥に飲み込んでおくべきものを、呼び水として言い表しておくような。そんな語感があれば、もう少しキャッチーな感じの作品になるのでしょうが、作者はあくまでもこの七七をそれぞれ単体として完結させ、句としての屈折も内包させようとしているようです。

盗られしものをみな夜濯ぎす

この句においては・・

澤　ああ、この句ね。盗ってきたものを「夜濯ぎ」するんならまだ分からなくは無いけれど、「盗られたもの」をどうやって「夜濯ぎ」すんのかって思ったね。

山田　まあ、それはそうなんです。上に着く五・七・五があればなにやら謎は解けるんじゃないか、もう一言、上五の詩句があれば見通しがつくんじゃないか、という欠落感がどうしても漂ってしまう。この形式における意味的屈折は、澤さんがおっしゃるような無理筋として捉えられたり、欠落の物足りなさに回収されらりして、なかなか形式としての熟成を果たすことが難しいようなんですね。返す刀で、この欠落感を意味からの浮揚として待ちわびる読者が増えれば、これは、一定の様式として作品成果を重ねることもできるのではないかとも思います。

澤　僕はね、

爪焼くならば誘蛾灯なり
雨遠退かす鈴虫の山

ここらへんはいいと思うね。

山田　連歌の七七としての風格もありますね。

月映るまで鏡を傾ぐ

ここらへんは、連歌の句としてほんとうにありそうな感じ。

澤　それからね

鮎挿すひとのあとから渡る

これは、うまいと思ったね。

山田　なるほど。さても、俳諧の連歌の七七みたいだというのは、この作者にとって必ずしも褒め言葉になるわけではなくて、むしろ、避けたい事態かもしれませんけれど。

澤　でも、連句の七七としても行けそうな句がいくつもあるよね。

山田　ということは「二の句」がつげる状態ということになりますね。

澤　この句の前を作ってみたくなるね。

山田　それは返す刀で、一句としての完結性が一歩後ろに退いているということでもあるわけで、そこが作者としての矜持次第では、「避けたい事態」ということにもなるのでしょう。

澤　なるほど。

山田　いずれにせよ、こうした批評性を内包した実験作を円錐新鋭作品賞に送ってきてくださるのは、ほんとうに光栄だ

しありがたいことだなあと思います。ということで、私はこの作品に賞をお送りして掲載させていただきたいと思うんですが。

澤　そうだね。編集部からの特別賞ということで。全部じゃなくて、十句とかね。

山田　了解しました。

澤　今日は、意見が合うところが少なくないね。選んだ作品も被ってるし。

山田　あ、そうですね。今まで、澤さんとはまったく重ならなかったりしましたからね。

推薦句の発表

山田　さて、ここからは、作品賞としての推薦句の発表です。

澤　では、まず、

冬晴れや畑に市街のぞみつつ

「蟻のゐる日向」より

どうということのない句なんだけど、「冬晴れ」が効いてるし、東京近郊の風景の農村風景が思い浮かぶね。「畑に市街のぞみつつ」という光景がよくわかる。僕はこの句をなんとなく捨て切れなかったんだよね。これが一番良いっていうんじゃないんだけどね。

山田　なるほど。

澤　それから、これだね。

除雪車に遅れ除雪車続きけり

「君は嫁がぬ世界」より

除雪車の後に何がくるのかと思えば、除雪車というのが意外だったね。「続きけり」というところは、いまひとつ惜しいといえば言えなくなんだけどね。

山田　かといって、こうでも言わないとなんとも、というところでもありましたね。

澤　「除雪車に遅れ除雪車」というのが意外だったので、「続きけり」というのは、とりあえずであるという感じがしたんだよね。

山田　では、お次を。

澤　瑕疵がないというわけではないんだけど、

文字から墨へ墨から文字へ雪柳

「文の訪れ」より

山田　こちらは、どういう状況なんでしょうか？

澤　これは、筆で墨書しているという状況でしょう。書いていて、紙からふっと筆を離して、墨だまりへ。で、筆を整えて、墨だまりから紙へ、そこで、また、墨が文字になっていくという、そういうことじゃないかなと思うね。

山田　ふうむ。

澤　まあ、「雪柳」がとりあえずなんだけどね。まあ、悪くはないけど、ベストとも思えない。「文字から墨へ墨から文字へ」という文字を書いている時の墨のありようと、筆にふくませる墨のありようとの連続が面白いと思ったんだよね。

で、次が、

神々は柱で数ふ花朱欒

「少年」より

「花朱欒」が、この場合上手く効いて

ると思いましたね。まあ、「神々は柱で数ふ」というのは、いわば、そのままのことなんだけど、「花朱欒」との組み合わせが効いている。「朱欒」もどことなく神々の世界に通じているような言葉でね。

山田　「朱欒の実」ではなく「花朱欒」というところが、この句では大切ですね。

澤　うん、そうそう。

で、最後は、

稲雀グルメサイトに載らぬ店

「lost and lost」より

まあ、稲雀が稲に群がっているそんな感じ、グルメサイトにも載っていないけどなんだか流行っている店の賑わいみたいなのが、その稲雀の感じでよくわかるなぁ、と思いましたね。自分なら絶対作らない句だけれども。

山田　では、ここからは、山田の推薦句を。

未だ揉めに揉めてゐるのに鳥帰る

「犬と戦ふ」より

「鳥帰る」は、春の季語。〈日本で越冬した渡り鳥が北方へ去ること〉というわけですが、まるで〈揉め事の当事者なのに鳥が帰っちゃう〉という流れにすることで、季語を強引に俗世界の文脈に接続させています。「鳥帰る」とか「鳥雲に」という季語に対しては、さりげなく清澄な詩心を発揮しちゃう人が多いような先入観があるのですが、そんなもの知るかと言わんばかりの、この句の俗な感じ、好きです。

澤　ふむ。

山田

病床の秋刀魚の味を忘れたる

「ブレーキを踏む」より

病床での生活が長くなり、すっかり焼きたての秋刀魚の味なんぞ忘れてしまったというのでしょう。意味は、わかります。私が注目したのは、助詞の使い方です。「病床で」「病床にて」ですと、これはそのまま説明になってしまいます。「病床は」とすると、病床そのものが主語となる読みも展開されようかと思うのですが、そうなると、内容がファンタスティックに傾いてしまって、俳句の良さが後退するように思うんですね。

澤　ふむ。

山田　「病床の」の格助詞「の」は、「病床の秋刀魚」という連体修飾でもないし、「病床の忘れたる」という主格として扱うのもふさわしくない。あえていえば、この「の」は、キレ字として機能している。「病床や秋刀魚の味を忘れたる」とするとすんなりしそうです。でも「病床や」だと、歌い上げるような調べが響いてしまって、句の内実とのズレがあるようにも思えてきます。ということで、この句の「の」は、俳句ならではのキレとして読ませていただきました。

ということで、助詞の使い方を言祝いで、推薦句とさせていただきます。

澤　はい。

山田　次は、

破れ芭蕉君は短気暢気ベイベ

「浮力本願」より

「君はファンキーモンキーベイビー」と

いう下敷きがあるからのフレーズ。「短気」なんだか「暢気」なんだか、どっちなんだよ、というような感じで、「ベイベ」のあとに「？」がイメージされているかもしれません。こうした一見ふざけている修辞が、「破れ芭蕉」と接続していることに、妙なエネルギーを感じました。〈芭蕉破れて繕ふべくもあらぬ哉　正岡子規〉〈絣着ていつまで老いん破芭蕉　原石鼎〉などには、その破れをネガティブなものとして感じるところを読みとれると思うのですが、この句の「破れ」は、先行するものや通念を破るという意味でのポジティブな「破」なの？　などとさえ思いました。作り方もそれこそ破天荒ですが。

澤　なるほど。

山田　こちらはさきほど話題に出た句です。

麗かや性交渉を示す手話

「パスタごと」より

「麗か」とは、春の心地よさを表す季語ですけれど、それだけに、大抵の表現が心地よさの喩になってしまったり、屋上屋を架すような展開になってしまいがちなようにも思うんですね。ところが、この句の「性交渉を示す手話」は、少し違うところへ「麗かや」を運んでいく力があるのではないかと思ったりした次第です。

澤　ふむ。

山田　で、こちらが最後。

ぬらぬらと株価這ひたる西鶴忌

「ＴＮＴ株式会社」より

そういえば、株価の変動を示す折れ線グラフは、微妙な小刻みをしつつ「這う」ように、見えなくもない。さて、この「這う」を「株価」の説明に留めずに、もっと違う顔つきをさせることができないものか、ということで、「ぬらぬらと」。蛇などが「這」う方向へとイメージを膨らませました。これをベタづきと見る趣もあろうかと思います。さて、そこで「西鶴忌」。『世間胸算用』『日本永代蔵』など、ゼニにまつわることを連想させるにふさわしい名前が上がりました。「ぬらぬらと」と「西鶴」という別の二つの方向に引っ張られ、危ういバランスで「株価這ひたる」というわけです。この言葉遊びのドライな感覚が、新鋭作品として好ましく思えました。

澤　はい。

山田　さて、今回は五十八作品もお寄せいただきました。お一人につき二〇句ですから、一一六〇句なわけです。ここから選ぶということになりますと、触れたくても触れられなかった句もおのずから出てきますね。もっと紹介したかったですね。

澤　そうだね。これだけあるからね。

山田　作品をお送りくださいました方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。ともあれ、審査会が終わるこの段階においても、作者が誰なのか、知らない状態なのです。

澤　そうだね。

二〇一九年三月二十六日　東京　東陽町にて